

父死去後、今日まで、訳書は常に、そばに置いて居りましたが、なかなかに紐解けず、漸く、齡重ね書の内容を知りたいと思いが強くなると共に、且つ自身存命中、若くして冥府に旅立つを得なかつた父の最後の心境を知りたく、全稿パソコン入力に挑戦しましたが、当時は、文語体で且つ旧漢字、字数も多く、且つ父は東大、文科系法律科の出身で、私には、判読出来ぬ語句も多く、且つ英・独等の表示スペル等写文中誤記、誤字多くありますが、読むには堪えるものに出来たことには、不肖の息子として感無量であります。ご関係の方々には、父が何を悟っていたのかご存じかも知れませんが、私には、何も残していきませんでしたので、此の書の中に、私自身は、これからも答えを求めていく事にくことになると思います。

父の生前に、並々ならぬご支援頂きました皆様深く感謝申しあげます。若し、お読みいただけますなら、冥府の父の歓びは如何ばかりなるかと思ふ次第です。

平成二六年十月三日

鈴木 俊藏

拝

父は、第1次太平洋戦争に、内地召集され、定かではありませんが、重砲部隊に配属され、肋膜炎(肺結核)を煩い帰宅、昭和28年東京から妻の故郷近く海辺に転地療養、私、妹二人を授かりました。然し乍ら、戦時中のこと、結核の薬を入手できず、子供とふれあうことも出来ず、個室に隔離状態で過ごし、昭和30年6月に、36歳で甲斐無く死去いたしました。私の母の献身的な介護もかなわず、無念な事と思いますが、私、早産で、ある種の発達障害児にで、当時の記憶全くなく、父の顔、姿声など、何も覚えありません。父の遺品に色々な専門書が蜜柑箱に何箱も有り、東京の書店が、買いに来たと母が話していたことが有りました。又佛教、基督教、その他諸々の宗教関係の本も、あつたようですが、死後、度々の引越しの中で、遂に今手元にありますのは、鈴木三重吉全集と遺稿だけとなりました。母も私への期待は出来ず、父によく叱られた、立派な人だったとしか語りませんでした。その母も、「回忌となり、父のこと知るすべはありません。

父の、遺稿、製本する力は私には、ありませんが、若し、印度文学を、勉強される若い方々に、此の訳が、役立つことが有りましたら、ご紹介頂き、使つて頂ければ望外の喜びです。私も、今年8歳となり、断捨離をする年齢となりました。手元に置いておいても、今後これを役立てるすべはありませんので、廃棄処分とせざるを得ません。それでは、父が何を悟り、此の書を選んで訳したか、深淵の思いをゴミ箱に投げ入れることとなり、如何に、不肖の息子としても忍び得ません。タゴールとインターネットで引きましたら、貴交流会が目にとまりました。大海の中に載せる小舟を見付けた思いです。お手元にお届けいたしますが、その後の処置は、総て、そちらに、お任せいたします。どの様な、形で有りまして、苦情など、申しあげません。父の思いを、くみ取って頂ければと、ただ、それだけを、望む次第です。

2019年1月吉日

鈴木俊藏

追拝